（旧和商）

社団法人 和商同窓会会報

（新和商）

（発行所）和歌山市砂山南３丁目3-94　県立和歌山商業高校内 TEL 36-6456　社団法人和商同窓会　（第27号）平成10年３月２日（月曜日）

友人との深い絆
＝わが心の財産＝
出会いを大切に

＊

前大阪支部長
増田　明
〈旧24期生〉

古い話になりますが、私は大正十四年四月に母校に入学しました。当時自宅が雄湊にありまして坂の上町にあった元の母校がすぐ近くでありました。小学校当時から和商に入学出来たら学校が近くて通学が大変便利だと思っていました。ところが学校が坂の上町から西浜の新校舎へ移転しましたので学校が急に遠くになりました。入学後は自転車で通学することになり、毎日自宅を出てから東長町筋を通り抜け、六十一連隊の営門前を通り練兵場に出て、あの広い練兵場を横断して西浜の学校に通学しました。

当時の道路は何処もまだ地道のままでありましたので雨の日には自転車ごと泥まみれになって通学したこともありました。古い思い出の一つです。そうして西浜の校舎で五年間の学修を終えて昭和五年三月に母校を卒業しました。そして学校のお世話で福助足袋（現在の福助）株式会社に入社以後四十七年間同社に勤務しました。国内や海外の支店勤務を経て、後に堺の本社に戻り、常務取締役に就任し長年に亘り会社経営に参画してまいりました。昭和五十一年末に役員を退任、同時に退社しました。その間七年間の長い間軍隊に召集され、第一線部隊に従軍中たまたま終戦により九死に一生を得て生還帰国しました。誠にきびしい体験をしてまいりました。

又社会人として数多くの団体に関係し、その役員など歴任してまいりました。

こうした社会活動の中で十五年間、同窓会の大阪支部長をつとめさせて貰ったことは母校への一辺のご恩返しであったかと思っています。今、静かに振り返ってみますと戦前戦中戦後の時代を数々の思い出と共に生きてきたことであります。

さて、長年に亘る歩みの中で、何時の日も何により大切にしてきたことは友人との出合いであります。学生時代には学友があり、軍隊では、戦友があり、会社では職場の友人があり又社会に出てはここでも数多くの友人があり、共にその出合いを大切にし、共にその友情を温め合うことに努力してまいりました。

良い友達を持つことは大きな〝財産〟を持つことだと常に自分に言い聞かせて、その出合いを大切に大切にしてまいりました。自分の今日あるのもこうした友人との深い絆の賜物と思っています。

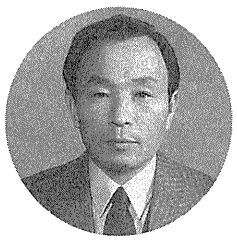
ご互に身分や生活環境が大きく変っても友情は変らず生き続けていることは大変嬉しいことであります。

こうして年を重ねているうちにだんだんと高齢化が進みまして大切にしてきた友人も年毎に人少となり、一抹のさびしさを感じる昨今ですが、今尚友人との深く温い交りは私の大きな〝財産〟として、心の奥深く根づいています。

最後に母校並びに同窓会の更なる発展と同窓生諸兄のますますのご活躍とご多幸を祈念申しあげて擱筆させて頂きます。

我がふるさと
県和商高

学校長　中尾憲市



私は旅が大好きです。「行く手にどんな真実が待っているか」と旅人になって出発する時は、心が弾みます。旅先でその土地土地を守る人のまごころに出会うのは喜びです。ありふれた素人の手で、花を植え、名所を誇り、塵一つにも気を配っている様子。旅人を慰める自分のふるさと、小さなその土地の人々の城です。また旅に、旅人の心を悲しませることもあります。「旅の恥はかきすて」という大変腹の立つ言葉もありますように、旅人の中には、その土地のまごころへ思いやりの一かけらもなく、これを隣りの土地と比べてひやかし、あらを探し、口ぎたなくけなし、それに空缶・空びん・紙くずをすて散らかして通り魔のように、かけぬけて行く旅人もあります。

私は旅から戻るといつも旅の思い出にひたりながら、自分のふるさとの上に考えます。

ふるさとに自分を置いて、ふるさとを我が事と憂え、美しさを探し、誇りを保ち、責任を負い、旅人にもサービスし、仲間を恋い、仲間の環を拡げようとする。

生涯を旅で終っても、行く先々に仲間を創り、どこに行ってもそこをすばらしく変容させる。自分の通りすぎた跡は、どこも美しく、自分の努力が生き続ける。

思い出はいつも楽しく、どこの仲間とも生涯心が通じてなつかしい。自分の旅した所、移り住んだ所は、すべて我がふるさと。どこを再び訪れても、自分の蒔いた種から咲いた花に出合い、自分の植えた苗の実りを手にできて、幸せがついてまわる。

私の願いは、同窓会の皆さん、生徒達と共に〝我がふるさと・和商〟の誇れる美しさを保ち続けることです。

第35回和歌山県高等学校同窓会連絡協議会開催す

此の会は昭和三十八年に「和歌山県高等学校同窓会々長会」として発足以来三十五周年をむかえました。途中で名称を「和歌山県高等学校同窓会連絡協議会」と改称され県下各高等学校同窓生の唯一交流の場となっています。

現在参加校は四十二校で、開催校は輪番制です。

平成九年度は県和商が当番校となりましたので、同窓会と学校当局で実行委員会を設け、会議を重ね、平成九年九月二十日に開催いたしました。

当日は県知事代理、県教育長代理、また地元首長として尾崎市長をお迎えして錦上花を添えていただきました。

会場は小川理事長のお世話でノーリツ鋼機の会議室を拝借し、一二九名の方がご参加くださいました。

会議の内容につきましては従来と趣を変え、和商新制二期生で松下興産㈱副社長川上武雄氏に講演をお願いし、皆様のご好評を拍しました。

母校の校長先生はじめ先生方及び同窓会のみなさまのご尽力により無事終了させていただきましたことを報告いたします。

旧26同期生会

人間関係を育め
＊後輩に託して＊

旧29期生　津田　義夫

一九九五年四月。私は高校生活への希望と不安を抱きながら、そして県和商の生徒として学んでゆける喜びを感じながら、我が校での高校生活のスタートをきりました。

県和商は、九十年余の歴史と伝統を守り続けるとともに時代に対応した学校創りを目標とするすばらしい学校です。和商会館・視聴覚教室・図書館・格技場等の充実した学校施設設備も整えられています。現在は生徒ホールの改修事業が行われ、一九九八年四月には開設予定です。

このような由緒ある高校で、私は多くのことを学び、身につけることができました。学習面では、簿記をはじめとする商業科目・これからの情報化・国際化時代に適応するための科目・その他一般教養等です。

そして何よりも私を成長させてくれたのは人間関係です。友人関係をはじめ、先生方との関係や先輩・後輩との関係そして生徒会での人間関係。私にとって、これらの関係のどれが欠けても、私は今の自分にはなれなかったような気がします。そして、この人間関係は、人への思いやりや協力することの大切さを教えてくれました。こんな暖かい人間関係を育てることができたのはこの県和商のおかげだと思っています。

私は、県和商生徒の一員として高校生活を送れたことに誇りを持っています。そして県和商で過ごした三年間は一生の思い出になると思います。

これからの県和商を引き継いでいく後輩にも県和商生徒の一員としての誇りを持ち、すばらしい高校生活を送ってもらいたいと思っています。

生徒会長　金川　峰子
新47期生

生き甲斐をもって
商二九会

例年のように旧制和商二六期生の懇親会を平成九年十月十六日に「あおい荘」でひらきました。今年度は参加者が少なかったせいもありまして、家族や知人を交えて異色の同期会となりましたが皆様「和商」に関係のある人ばかりでしたから話に花が咲いて結構たのしく時を過すことが出来ました。

人数が少なくなってもこの会合は続けてゆくことを約して散会いたしました。

旧制26期生　西田　雄彦

夜来の雨もあがり、大阪方面のマイクロバスの到着した頃には太陽も顔を出した。平成九年十月五日、例年の通り新和歌浦の紀州和歌の浦温泉「萬波」にて、第十五回目の商二九会を、静岡県島田市よりの山田も出席して二十二名で開催しました。

三階のロビーで小憩後、カメラに収まって、宴会場「朝日」の席に着いた。十二時開会、畑の開会挨拶で「木犀の香りするよい時季に殆んどが八十才の傘寿の年を迎えられました。限られた時間ですが過去を思い出し、話題を進めてご歓談をして下さい。」

津田より本年亡くなられた三名と、卒業生一三三名中約八十数名の方が亡くなられていると報告の後、一同起立して物故者のご冥福を祈って黙禱を捧げた後で欠席者の近況報告をした。

十二時二十分吉田の乾杯の音頭で宴会が始められ、畑より中風寺の「ボケたらあかん長生きしなはれ」と題するコピーが配布された。

十三時十分今年のトップは、一昨年より練習を重ねられた畑より始められ岸、津田、堀川、木下、中西、玉置、西、炭江、山田と進み、歌の最後は例年の通り、玉置の「さよなら伊勢音頭」で締めくくり、炭江より「卒業時の一三三名が六十年を経て約六分の一の二二名も集まれるのは嬉しく思います。人生色々あったが節目の年で恐いのは孤独である。孤独を如何に生きるかは、何かの趣味や生き甲斐をもつ事で、この会の集まりの和を何時までも長く続けて行きたい。肩をはらず人生を大いに楽しく送って、元気で来年も又逢いましょう」と閉会の挨拶があり、三時過ぎ岸の発声で万歳三唱して再会を約して散会した。

（敬称略）

旧29期生　津田　義夫

節目の年となる
部活再開に華そえて

相撲部

今年度は相撲部にとっては、一つの節目の年であったように思う。

それは、約七年前から活動を再開し、今年度に入って、二度の全国大会の土俵にあがれたことです。

県和商の相撲部の歴史は古く、過去には数度の全国優勝をなしとげている。このことは体育館前の花壇にある碑が物語っています。

しかし昭和四十年代から部員不足が深刻になり、ついに五十年代には部員がなくなり休部に陥った。

数年間休部状態で、土俵も撤去されていたが、平成に入り部員は各学年一人ではあったが活動を再開した。

当時はもちろん土俵もなく、今と同様に県庁相撲道場への出稽古であった。又県庁道場が新築のために取り壊したときは、校庭の片隅に自分たちで土俵を作り、まわりにベニヤ板を打ちつけ、そして使っていない自転車置場を部室に改造して練習に励んだ。

このように先輩方が苦労して活動を再開してくれたおかげで、今年度、全国大会に出場できた。

まず一つは、第八十一回全国金沢大会である。この大会の本県における出場枠は二校であったが予選で箕島高に次いで第二位となり出場資格を得た。

本大会では、まだまだ力不足で決勝トーナメントに進むことができなかったが、選リーグを全勝したが、和歌山県チームは奈良県と岩手県には勝ったが、熊本県に破れ、決勝トーナメントに進出できませんでした。

しかしここでも予選リーグ全勝者で行う個人選に高岡は出場し、優秀三十二選手に入った。上位進出も期待したが、個人準優勝になった選手に破れ、入賞の夢は果たせなかった。

この二つの全国大会に出場できた事は、今後の和商相撲部の活動のなかで、大きな意味をもつように思われる。人数が少なくても、がんばれば、全国に出ていけるのだということで、後に続く後輩たちへの大きな希望になりました。

一方、今年度は、県大会においてもよくがんばった。金沢予選では石中が、県高校総体においては芝崎が、貴重な一勝をあげ、団体準優勝に大きく貢献しました。

このように今年度は、県大会、全国大会共に充実した成績を納めたように思う。

次年度においても、これ以上の成績を目指していきたい。まず県大会の優勝を目標にがんばりたいと思う。

これからも、先輩方が残してくれた功績に少しでも近づけるよう努力したいと思います。

それが一番苦しいなかで再開し、活躍してくれた恩返しだと考えます。

最後に、いろいろな面で相撲部の活動に御協力を頂いた学校関係の諸先生方にお礼を申しあげ今年度の状況報告と致します。

〈現相撲部員の人たち〉

懐旧親睦会催す
＊オーストラリア旅行記＊

卓球部

坂本富士雄先生を囲む卓球部懐旧親睦会（一期生～九期生）の平成八年十二月の会合で海外旅行をしようという話題が出ました。

行き先は松下興産㈱（二期生の川上武雄氏が副社長）が経営するオーストラリアゴールドコーストのロイヤルパインリゾートとシドニーに決まりました。決まってからの約六ケ月間は会員の間で開催、初めての海外旅行の者もあり、又オーストラリアは初めての者が殆んどで、気候の話や服装、外貨、お土産物等々、期待に胸をふくらませました。参加者は坂本先生が都合で参加出来なくなり十六名となりました。

第一日目　五月十四日㈬

関西国際空港のロビー、アンセット航空カウンター前に十八時集合でしたが十七時にはもう全員集合、荷物を預け別室で結団式を行いました。団長の川上氏挨拶、幹事長鳥居氏の旅行の楽しみ方等ユーモアたっぷりの話で旅行のスタートが始まりました。

無事出国手続きを終え搭乗迄、早くも免税品を買う人や、ウイスキーを調達する人などそれぞれ時間を過しました。

アンセット航空の八八二便は定刻二十時ブリスベンに向け約八時間のフライトに出発、満席の機内ですが国際線のサービスを楽しみ乍ら眠りにつきました。

第二日目　五月十五日㈭

ブリスベン空港に五時二十五分に到着、入国手続きを終えロビーに着きますと早朝にも拘わらずＭＩＤオーストラリア社員の出迎えで感激しました。バスで早朝のブリスベン市内を観光、日本と全く違う町の風景に写真のシャッターの連続で眠気もふっとんでしまいました。市内観光の後、ローンパイン　コアラ保護区のコアラ公園で一人ずつコアラを抱いて写真撮影、カンガルーに飼をやったりで童心に戻り楽しそうでした。

午後二時、目的のロイヤルパインリゾートプリンスホテルに到着。ホテルスタッフ総出のお出迎えで一同感激、それぞれ部屋に入りました。早速ゴルフに出掛ける者、土産を見に行く者等、皆元気です。

ホテル第一夜の夕食は最上階のメインダイニングでゴールドコーストの夜景を眺め乍らコンチネンタル料理を楽しみました。

第三日目　五月十六日㈮

午前中は観光組とゴルフ組に別れ午後一時に合流、ホテル所有のボート、ロイヤルパインプリンセス号を借り切り十六名で日本では味わえないリッチな船上パーティーの後、水上飛行機でゴールドコーストを空から遊覧しました。夕食後、全員バスでカジノへ体験ツアーに出発、初めてのカジノで女性は雰囲気に驚いた人が多かったようでした。

第四日目　五月十七日㈯

ゴールドコーストより約一時間三十分のフライトでシドニーに到着しました。シドニー湾とオペラハウスの見えるハーバーサイドのレストランで昼食、ＭＩＤ所有のチフリータワーを見学、シドニーの最高の場所にそびえる四十三階のビルからのシドニー湾の眺めはさすが世界三大美港の一つと感心しました。夜は三ケ月以上予約でいっぱいのチフリータワーにある「フォーティーワンレストラン」で夕食、カンガルーの生肉のサラダ、野ウサギのローストが好評でした。

第五日目　五月十八日㈰

いよいよ帰国日、あっという間に五日経ちました。シドニー国際空港九時二十五分発のＡＮ八八三便で八時間半のフライトで午後六時、無事関西国際空港に到着、全員無事故で楽しい旅をすることが出来ました。

素晴らしい仲間との旅行は今までにない楽しい旅でした。来年は坂本先生も行ける国内で二泊三日の旅を計画することに決まりました。

新4期生　鴨谷　清三

励ましと懐旧の情で第二の青春

昭和三十年三月に、小松原の母校（旧陸軍兵舎跡）を離れ、四十二年を経て新四期生は、平成九年三月で全員が還暦を迎えました。卒業の頃、国内では「大学は出たけれど」の言葉通り、大不況の真っ只中で就職難の時代でした。進路決定には、先生をはじめ皆様に大変お世話になりました事は忘れてはいません。

それから四十二年、目を閉じれば過ぎ去った、あの夢、恋、喜、楽、悲、等々、感謝や感激があって、長く感じたり、短く思ったりして、懸命に生きたこれまでの事を誇りにさえ思っています。

そして、これからこそが、本当の自分自身の人生ではないかと気が付いています。引続き現役を続ける人、新しい転進をする人、満を持する人等々、新しい青春を見つけようとしています。

離ればなれになった大阪地区の新四期（Ｈ九・九現在六十七名）でしたが、平成六年に鴨谷、田中、有本、川崎、神谷、神野の諸氏が中心となり、会合を持つようになりました。それからは毎年開催、回を重ねる毎に親睦も深まり、一泊旅行の提案も出る程で、この四年間の出席者は延べ五十八名となりましたので、殆どの同期生と語り合う事の出来た楽しい会合となっています。

また、ゴルフコンペも実施していますが、とうとう平成九年九月十一日には、石垣、川邑氏のお世話で、和歌山の同期生と合同で貴志川ＣＣで開催しました。大阪より十名の参加となりました。が、なにしろ四十二年振り、大歓迎となり、強風、雷、大雨洪水の警報どうり、全員が水も滴る…となり、あげくハーフで打ち切りで一番風呂となりました。

しかし、そのかわり懇親会は、時間タップリ、和気靄々「顔と名前」から始まる近況のの報告や、先生、先輩、同窓生とのふれあい、クラブ活動等々の思い出話しに花が咲き、とても楽しい限りでした。

そして、これを機会に、毎年の実施をはじめ種々の交流の提案もあり、再会を約して帰路につきました。

様々の経験を経た私達が、これからの人生「第二の青春」をどう生きるか。真剣に考えているに違いありません。懐旧の情を暖めると共に、励ましながら、喜び合う事が出来ればと思っています。

新4期生　西本　修身

丘を越えて

和商三八会有志一同忘年会をかね師走、六三園に集う。七十才の丘を越え遠来の友はじめ久々の参加者も含め二十九名が元気に勢揃い楽しいひと時を思い出話に花をさかせました。

昭和十八年大東亜戦争の最中、即戦力を必要とした戦時体制下、翌春を待たず十二月に繰上げ卒業、新年早々就職先は殆んど軍需関連、予科練志願など、以来五十五年目寅歳の新春を迎える。勿論卒業記念写真もなく、物故者も六十六名約三〇％となる。今回は記念に色紙の寄せ書きを各自持ち帰ることにした。中央に懐しい和商の校章を手作りスタンプであしらったのがミソ。同期生のご健勝と母校の益々の発展を祈願しまづはご報告まで…。

旧38期生　清水　敏夫

母校のご希望により社会の各分野でご活躍されている先輩諸兄の講演が次のとおり行なわれております。

第一回（平成七年）
和田久緒（新一期生）元湊商事社長、和商同窓会第七代理事長

第二回（平成八年）
小村文宏（新二期生）小村産業社長、和商同窓会副理事長

第三回（平成九年）
藤岡弘章（新三期生）㈱レイケァセンター取締役社長、和商同窓会常任理事

第四回（平成九年）
木原定男（新一四期生）フジ医療器㈱取締役営業本部長